

お正月の特集の記事から(1月1日~3日の記事)

先ず目についたのが「新春特別教育鼎談」(2人は対談 3人である話し合いが鼎談です)麻生 開成の校長と教育博士の3人が「どんなに時代が変わっても教育の本質は変わらない」のテーマでの話し合い。時代が変わっても変わらないその本質とは? 何と言っているのが興味があったからです。そしてその本質とは 教員 学友からの触発により、子どもたち一人ひとりの可能性を伸ぶこと、その本質を忘れた経済至上主義、大人の都合による教育改革には危機感を抱きます。そして今の社会に子どもを合わせるのではなく、一人ひとりの子どもがもつ才能を伸ばし、その理想を築くための営みですとしています。そのために具体的なこととして日本の英語教育を挙げています。開成では英語教育の充実を目指しネイティブの英語の専任を2人、非常勤を5人という体制で授業は米国の教室にいるかのように提案しています。また、開成でいえば東大を目指す受験校のトップの学校です。そこに入学するためには激しい受験競争に勝ち抜いてはじめて入学できる学校です。超エリートなのです。そして国もおとトップクラスの子どもは10%いれればいいという方針にも合致しています。日本を支えるトップのエリートを育てるための教育は変わらずその本質をより強化していくというその先に理想の未来があるとしているのですが、大々数の子どもたちの未来はどう考えているのでしょうか。それが日本の教育を考えることになるのでしょうか。私には受験競争の教育のさらなるグレードアップをしようという宣言に思えるのですが、その記事の下にはサブツックスの宣伝が大きく載っていました。この記事は「広告特集」だから仕方ないのでしょうか。競争の本道は続く最と強化されて続いていくのかなと思いました。(2023年1月1日の広告特集の記事から)

でもその日の一面は「灯、わたしのよりどころ」という特集記事が飾っています。漫画家の細川てん(54才)さんのことが載っていました。

何をやってもできない子、自分を下げて、自立できないように生きてんだよ、母親に言われて育った。絵のコンクールで入賞してもほめられたことはない。集団行動が苦手。幼稚園の昼寝の時間が嫌い。「なぜみんなでお昼寝しなきゃならないの?」と思っていた。漫画家になり「少しづつになってよが大ヒットしたときも、母親には「自立つことをして」と言われた。どうせ私は何をするにも、一歩踏み出すのが怖い。電車でひとり速出するの緊張すると語る細川さん。編集者に宝塚に誘われたときも「場違いなやつだと思われるのでは」と不安を感じたけど意を決して宝塚へ。幕が開いた。トップスター春野さんの登場。あっそっだけ電気がついたように輝いて神々しい。その姿に励まされた。それから宝塚通い「私なんてダメ」と縮こまっていた自分がだんだんいなくなった。そして「子どものころ家も学校も居づらかった細川さんにとって、逃げ場所は空想の世界だった。『この世は生きているだけで生きにくい場所なんです。そんな現実社会から逃げられる場所』それが宝塚だと。」「応援する私、励まされる私の見出しと重さなる。母ではなく、宝塚を見つけた私と。

一人ひとり誰でも「よりどころ」は必要だし、見つけることができると思えば、励まされたいと思えば、それと同じように左下の折々のことばが教えてくれているように思った。そこには「計画したことのハゲリはできません」と、目標とはそもそも達成できないもの、とくに窮壁をめぐらしたりすれば「こなす」ことが目的にすり替わると、独学で大学受験もその後の学びもやり通した経済学者(柳川範元)は言う。ありました。初めに挙げた鼎談からは想像できない人たちもいることを誘み安心した私がいきました。

そしてその裏の裏にも「喜びも失望も、生きている実感」という見出しで芥川賞作家津村記久子さんの記事が載っていました。

津村さんは新卒で印刷関係の会社に入り9ヶ月ぐらいたった頃の話です「電話で仕事の話をしているだけで怒られるなど理不尽なことが多くなったり、存在しないファイルの紛失を私のせいにされたり」と。パワハラが多くなり「もう会社勤めはできないと思ったという時期があった。そんな時、職場のカウンセラーに「自分は火曜日と木曜日の夕方にいるので何かあったら言って」と。「人に気にかけてもらえたのが支えになった」とあります。そんな小さなことでも支える力になるんだなあと思いました。小さなことでも本人が応援してくれると、感じる大切なのです。そして「感情のケチ」は「お金のケチ以上につまらない人生だ」と思います。「落ち込むことで立ち直ることを学ぶ」。「落胆させられることにコスパが悪い」と、その人に近寄ろうとしない人は立ち直ることを「学ばない」。「人の心を動かすのは『点』の良い体験ではなく起伏で『いろいろあったけどよかった』と思うことじゃないでしょうか」と自分の人生を見ているだけでは不当だと思ふことや自責もある。その人なりに生きている人生を見ることを通して「これは自分がひがんでいる」とか「これはおかしいから怒られる」とかそういうことがわかってくると思うのです。その見出しは「喜び失望も生きている実感」とあります。「絶望の裏には希望がある」と風見穂香さんは歌っています。私もそうだなと思います。「何人でみんなと一緒に昼寝したくない？」「残さないうち食べようね」お出掛けで「アッこれ何にや見つけて列を離れたらちゃんと並びなさい」と言われ「アッ」と感じる4~5才の子どもたち。これは自然なことなのに今保育園、幼稚園ではしつけとしてダメよと指導が入るのです。頭ではなく心で感じている子どもとちゃんとさせなくてはいけません。という保育士の矛盾はそのまま学校へとつながっています。「みんな一緒に」ではなくて一人ひとり違っていいはずなのに。それができない自分がおかしい。ダメなのから下を向いてしまう子どもたちに「大丈夫だよ、あなたはあなたのみままでいいんだよ」と信じて応援してあげていいと思います。新幹線に乗っても、各駅停車の金毛行に乗ってもちゃんと目的の駅に着くのですから、ゆっくりは景色もよく見えるのです。

2023年1月1日~30

竹内春雄 (2)